

大伴家持立山賦の特質

森 斌

はじめに

大伴家持は、養老二年に生まれた。万葉集に四百七十三首の歌を残す。歌の初出は、十五歳であるが、二十九歳の時越中国守として赴任した。天平十八年から天平勝宝三年まで五年間が越中の守であった。この五年間に二二三首の歌と漢詩一首を創作しているが、ちなみに、越中守赴任以前の歌数が、一五八首であり、また少納言に任命されて越中を去ってから四十二歳まで、九二首である。越中時代の天平十九年に作られた作品のみに用いられた言葉に「賦」がある。家持と同族池主に詠まれた長歌五首に付けられているので、それらは万葉五賦ともいう。とりわけ家持の立山賦は、北アルプスを代表する立山を歴史上最初に紹介した歌であり、且つ三千メートルの山がどう表現されているのかと言う興味もあって、三十一句から成り立つ長歌と短歌の特質を探ってみたい。

立山の賦一首并せて短歌 この立山は新川郡にあり

天離る 鄙に名懸かす 越の中 国内ことごと 山はしも
 繁にあれども 川はしも 多に行けども 皇神の 領き
 います 新川の その立山に 常夏に 雪降りしきて 帯
 ばせる 片貝川の 清き瀬に 朝夕ごとに 立つ霧の 思
 ひ過ぎめや あり通ひ いや年のはに 外のみも 振り放
 け見つつ 万代の 語らひ草と いまだ見ぬ 人にも告げ
 む 音のみも 名のみも聞きて 羨しぶるがね(四〇〇〇)
 立山の降り置ける雪を常夏に見れども飽かず神からならし
 (四〇〇一)

片貝の川の瀬清く行く水の絶ゆることなくあり通ひ見む
 (四〇〇二)

四月二十七日に、大伴宿祢家持作れり。

一、家持立山賦

立山がどうして歌の素材になったのであろうか。その一つは、家持が正税使として恐らく五月上旬に上京することがあげられる。弟書持の挽歌で、越中の荒磯の波を見せたかった、といっているのであるから、都の人も越中の事を知りたいのであろう。

山田孝雄氏の言う都にいる人々への「語らひ草」とする気持ちが当然あつたであらう。^(注1) その対象として近親者が浮かぶが、具

体的には妻大嬢、叔母であり義母坂上郎女であらうか。また橘諸兄等は歌を心待ちにしていたであらう。家持が山を素材に歌を作つたのは、既に国府近くの二上山賦があつた。三月三十日に作つていた。そもそも「賦」ということも漢詩の贈答、書簡のやり取り、文学論の開陳等が中国趣味に基づくものである。

池主との交遊がかかる中国趣味を倭歌に取り入れさせていったのであろう。二上山の賦の創作から二十七日後にやはり山を素材にしている。この間には、布勢の海水賦が四月二十四日に作られている。国衙に近い名所はこれで網羅された。さらに立山の賦が創作されたのであるが、橋本達雄氏は、名勝立山がないのは片手落ちとの批評があつたのであろうと推量する。^(注2) 伊藤博氏は布勢の湖を挟んで、近景の二上山賦、遠景の立山賦となつてゐることと、結果的に山に挟まれた河内になつてゐることを

指摘する。^(注3)

これら二上山と立山の賦には、共通する特質が見られる。それは、山と川がセットで歌われていることである。さらに山が主題になりながら、赤人や虫麻呂の富士山をうたつた歌よりも、本質が人麻呂や赤人にうたわれた吉野讃歌に類似していることである。

山をたたえる歌は、二種類に分けられそうである。一つが赤人の富士の歌に代表される山を中心にした山讃歌と言う形式、一つが人麻呂の吉野讃歌に代表される山川讃歌という形式である。山讃歌は神の支配している自然をうたう。山川讃歌は、聖なる河内として天皇もしくは国土の繁栄を主題にしてうたうものである。

四月二十七日は、初夏の頃とはいえ立山にはまだ数メートルの積雪があつて、白山であつたであらう。家持が立山をどう考へていたかは、歌に伺える。長歌が「常夏に 雪降りしきて」(四〇〇〇)とうたつているし、第一反歌に立山に降り積もつた雪を夏の間見ても飽きないのは、「神からならし」(四〇〇一)とある。

万葉集には、「神から」とは、数首の歌に用いられているが、なかならず人麻呂と、また養老七年の吉野行幸に従つて従駕歌をうたつた笠金村にそれぞれ、

玉藻よし 讃岐の国は 国柄か 見れども飽かぬ 神柄か
 ここだ貴き(二・二二〇)

み吉野の 蜻蛉の宮は 神柄か 貴くあらむ 国柄か 見
 が欲しからむ(六・九〇七)

とあって、讃岐の国や山川の清い吉野の宮を「神柄」として
 いる。「神柄」とは、神自身をいうのであるが、国や聖なる土地
 を支配しているのは、神である。その神の性格が土地の聖性も
 決定しているのである。人麻呂・金村と同様に家持も立山が神
 であると強調する。土地誉めの様式で山を誉めている長歌は、
 「皇神の 領きいます」といった時、神としての山はさらに強
 調されていることになる。この「皇神」とは、立山の神である
 が、皇祖でもある。やはり二上山賦にも「皇神」が用いられて
 いるが、ここでも山の神であるばかりか、皇室との関わりが意
 識されている。鉄野昌弘氏は、「山が始原そのままに『すめか
 み』として存在することが、ここが王土であることを示し、自
 分たちが越中にいることを根拠づける」という。^(注4) 即ち、「皇祖
 神」という皇室との関わりが意識されている山の神であり、越
 中の神であつても、「皇神」が立山賦でも用いられるのである。
 とこころが立山をのみ誉めているのではない。山と同様に川が
 登場している。土地誉めで有名なのは、舒明天皇御製であるが、
 そこには「大和には 群山あれど とりよろふ 天の香具山」
 (一・二)とあって、山に集中している。多くある山から一つ

の山を選び取ってくるのであるが、家持の創意は山と川をセツ
 トとして選び取ってきたことである。立山の賦といながら、
 立山と片貝川を不即不離のものとしているのである。山と川を
 セットとして聖性を語るのは、人麻呂の吉野讃歌が代表である。
 ここにも家持の創意があつたのである。山の歌といながら、
 その聖性は中西進氏の言う立山を神奈備山とするために川を参
 加させることで表現したのであるが、結果的に言えば家持は立
 山と片貝川で聖地立山河内としている。^(注5)

作品としては、長句と短句というバランスを欠くとしても山
 と川との対比、さらに橋本達雄氏の分析する自分と他人との対
 比が「あり通ひ いや年のはに 外のみも 振り放け見つ(自
 分) 万代の 語らひ草と いまた見ぬ 人にも告げむ(他人)」
 という対応で表現されておりながら、具体性のない集中力を欠
 く表現になっていること。^(注6) 高峰立山からわずか二十キロ程度の
 長さで富山湾に注ぐという急流で有名な片貝川の描写を「清き
 瀬に」と片づけてしまったということも歌としては不満である。
 しかし、そこには山自体の聖性と言うよりも、山と川を含む広
 大な聖立山河内なるものとして捉えようとした意図があつたと
 すれば、どうであろうか。

次に特徴としては、万年雪をいதாக立山の姿にある。夏で
 も雪をいதாக山は、神の支配する聖地だからというのである
 が、ここには山部赤人がうたつた富士山の歌が踏まえられてい

る。長歌にある「時しくそ 雪は降りける」(三・三一七)を反歌では、

田児の浦ゆうち出でて見れば真白にそ不尽の高嶺に雪は降りける (三一八)

とあって、雪降る季節でもないのに雪がある富士山を描いている。

家持も季節でもないのに雪が降り続くと長歌に言い、さらに反歌で夏中雪を見ても飽きないのはその神によると言う。家持の中には赤人歌の富士山と越中の立山が重なっていたはずである。

家持は伝統に繋がろうとする意識が強い。反歌が二首あるが、山と川に分けてそれぞれ詠まれている。赤人の吉野讚歌(六・九二四、九二五)と同様の構成である。人麻呂の吉野長歌の影響を受け、さらにそれを受け継いだ宮廷歌人の金村・赤人の影響が見られるのである。讚美の方法として長歌と第二反歌にある「あり通ふ(ひ)」も人麻呂歌(三・三〇四)や赤人歌(六・九三八)などに使用された伝統的な讚美表現である。「万代の語らひ草と」ということも赤人の富士山歌を意識しているから「語り継ぎ 言ひ継ぎ行かむ」(三・三一七)と結びつく表現になったのである。最後に長歌の結びも「音のみも 名のみ聞

きて 羨しぶるがね」とあるのは、人麻呂の明日香皇女への挽歌に「音のみも 名のみも絶えず 天地の いや遠長く 思ひ行かむ」(二・一九六)を意識させる表現であるが、旅行がままならなかった万葉人には、共鳴させる結論である。以上の如く見てくると家持が伝統をいかに重んじて作歌していたかがわかる。しかし、山の伝統に関して言えばむしろ個性的である。

吉野讚歌の影響がそうさせたのであろうが、聖地として山と川を描き、山に集中してはいない。

また、家持の立山の賦には、神が支配する山の讚美というよりも天皇が支配する神聖な山川とする賛嘆の感情が勝っている。それは、全体が三十一句のうちで立山の具体的な表現は、「常夏に 雪降りしきて」という二句のみであることにもよる。山部に赤人は長歌歌人として平均十九句で一首を創作しているが、富士の長歌(三・三一七)も十九句からなりながら、富士山の形容には十四句を用いている。家持がうたう立山の賦は、明らかに山と川を含めた皇神が支配する越中の聖地という捉え方である。

立山を皇祖神の居ます山という家持歌は、そこに個性がある。即ち、片貝川を含めた立山河内が皇神の支配する聖なる大地となのである。吉野讚歌の伝統を庶幾して、さらに赤人富士山歌を踏まえた類型的な表現といいながら、それは伝統的な讚歌に限定されながら、表現が簡潔という特色がある。ただ、現代

的な評価から見ると、立山と片貝川の表現が平板で簡潔すぎるのが問題であるが、簡潔であることが類型的な表現に満ちながら個性として山川の聖地立山を描くことになったし、また結論部の名前、噂で羨むほどの霊山というのも、越中という都から遠く鄙びた土地を配慮すると好ましい表現である。家持立山賦は、立山を吉野と重ね合わせる意図で創作されている。山を契機に越中が皇室と結びつく神の支配する聖立山河内であることをうたったのである。

二、池主立山賦

池主は、文学論でも詩作でも積極的である。とりわけ詩文においては、七言詩を最初に家持へ贈り、家持が後でその漢詩に答えたりしているが、ここでも短歌を「絶」と表記している。年齢的にも若干年長者であったのであろうか、奈良においても家持二十一歳の天平十年十月に橘奈良麻呂が若い友人貴族を集めた宴で、

十月時雨に逢へる黄葉の吹かば散りなむ風のまにまに

(八・一五九〇 池主)

黄葉の過ぎまく惜しみ思ふどち遊ぶ今夜は明けずもあらぬ

か(八・一五九一 家持)

とある。

散る黄葉の美しさを両者がうたうのであるが、そのはかなさを知る故にさらに遊ぼうとする。天平十九年の二月三月は、家持・池主の山柿をめぐる贈答詩で盛り上がったが、家持は引き続き三月二十日に「京にいる妻を思う歌」(三九七八〜三九八二)、同月二十九日に「立夏になつても霍公鳥が鳴かないことを恨む歌」(三九八三、三九八四)をうたう。歌語として「近江路、奈良の吾家」(三九七八)に地名が登場しているが、越中の地名はない。しかし、家持は病後の回復が順調になつてくるにしたがつて、正税使で上京することを意識して歌を作りはじめる。三月二十九日の日付をもつ「越中の風土は橙橘のあること希なり」(三九八四、左注)とあるのは、越中の風土を詩に詠んで都にいる人に知らせる意図である。池主もこのことは理解していたであろう。そういう状況で立山の賦に答えたのが次の三十三句から成り立つ長歌と短歌である。

敬みて立山の賦に和へたる一首并せて二絶

朝日さし 背向に見ゆる 神ながら 御名に帯ばせる 白

雲の 千重を押し別け 天そそり 高き立山 冬夏と 分

くこともなく 白栲に 雪は降り置きて 古ゆ あり来に

ければ こそしかも 巖の神さび たまきはる 幾代経に

けむ 立ちて居て 見れどもあやし 峰高み 谷を深みと

落ち激つ 清き河内に 朝去らず 霧立ち渡り 夕されば
 雲居たなびき 雲居なす 心もしのに 立つ霧の 思ひ過
 ぐさず 行く水の 音も清けく 万代に 言ひ続き行かむ
 川し絶えずば (四〇〇三)

立山の降り置ける雪の常夏に消ずてわたるは神ながらとそ
 (四〇〇四)

落ち激つ片貝川の絶えぬ如今見る人も止まず通はむ

(四〇〇五)

右は、掾大伴宿祢池主和へたり。四月二十八日

池主の立山賦は家持の立山賦とどのような違いがあるのであ
 ろうか。立山をうたう作品としての完成度は、家持のそれに比
 較してはるかに高い。それは立山を聖なる山として、讚歌の伝
 統的な表現を用いながら、立山を個性的な内容で描いていると
 ころにある。例えばまず第一に、窪田空穂氏、沢瀉久孝氏、中
 西進氏が指摘する「逆光の立山」ということがある。^(注8)中西氏は、
 四〇〇三番長歌の初句と第二句が「朝日さし 背向に見ゆる」
 とあることで、池主が国衙に居て立山が東に見える時、朝日が
 昇って来た時には、山の稜線がくっきりしても手前が暗くなる
 ことを「背向」と表現した、と想像している。^(注8)これなども越中
 に居て、立山を日々見ている歌人のなせる技であると共に観察
 力と表現力の結びつきを思わせる。また、長歌の構成は、家持

歌に類似しながら、そこで試みられていない神話的な時間をも
 歌で表している。神話の時間を導入しながら立山を「白雲の
 千重を押し別け 天そそり 高き立山」といった時には、天孫
 降臨に対応する山の存在がある。天孫降臨した高千穂の峰を、
 逆に地上から天上界に向かって説明した高い山の存在がそこに
 ある。そして家持歌と最も対照的なのは、その立山を描く具象
 性である。

家持が初句から十二句もついやして新川郡にある立山を提示
 しているのに対して、そこは八句で処理している。にもかかわ
 らず、逆光の立山、神の山、雲を押しつけて立つ山、「天そそり」
 する高山とあって、具体的な立山の描写がある。さらに「冬夏
 と あり来にければ こそしかも 巖の神さび たまきはる
 幾代経にけむ 立ちて居て 見れどもあやし 峰高み 谷を深
 みと」と立山の描写を展開してから、川と関わる片貝川溪谷が
 登場している。

ちなみに家持長歌三十一句の構成は①立山の提示が十二句、
 ②立山の具体的な描が二句、③川の描写が六句、④叙述の展開
 が八句、⑤結びが三句、ということになる。池主長歌は全体が
 三十三句からなり、①立山の提示が八句、②立山の描写が八句、
 ③川の描写が四句、④叙述の展開が八句、⑤結びが五句である。
 直接的な意味での川は、⑤の長歌収束部で登場させている。池
 主は徹底的に立山を山麓の深い溪谷から天高くそびえ立つ頂上

迄を描写して、直接の川は結論部で主題と結びつけ「万代に言ひ継行かむ 川し絶えずは」ということになっている。

家持歌を意識しながら、山の描写を大切に、さらに高山に相応しい溪谷を描き、最後に川を結束部に加えて立山賦をものした。山の描写も具体的に詳細でありながら、とりわけ叙述の展開は「落ち激つ 清き河内に 朝去らず 霧立ち渡り 夕されば 雲居たなびき 雲居なす 心もしのに 立つ霧の 思ひ過ぐさず」は、清らかな河内をも連想させていて、これも讚歌の伝統を踏まえている。第一首目の反歌には、常夏でも雪が消えない山であることがうたわれていて、また第二首目には片貝川が登場していて、家持の反歌構成に全く等しい。家持歌の「片貝川の 清き瀬に」とある表現は、池主歌では「峰高み谷を深みと 落ち激つ 清き河内に」とあって、立山に相応しい急峻な溪谷を伴う河内の表現になっている。家持歌同様に吉野讚歌の伝統を踏まえ、優れた長歌歌人として評価される内容であるが、分析して得られるのは、池主歌の具象的な、しかも適切な立山賦に相応しい山の表現ということになる。

但し、同じ立山賦でありながら、家持は「皇神の 領きいます」(四〇〇〇)という皇祖神を登場させた。一方、池主は「神さび」(四〇〇三)「神ながら」(四〇〇四)という一般的な神の存在で終始する。

三、万葉五賦

天平十八年七月に越中に赴任していたであろう家持は、翌天平十九年死を自覚するような大患を患った。病気の悲しみをうたったものから万葉五賦が作られ上京する迄を、ここで日付を中心に歌を整理すれば、次のようになる。

二月二十一日 家持 病に臥したことを悲しむ歌

(三九六二～三九六四)

二月二十九日 家持 病の苦しみを池主に訴えた歌

(三九六五、三九六六)

三月二日 池主 二十九日の返礼歌

(三九六七、三九六八)

三月三日 家持 「山柿の門」に触れた書簡と池主の示した二日の心情に謝した歌

(三九六九～三九七二)

三月四日 池主 三月三日をたたえた七言律詩

「山柿」などは、家持の才能から比べるべくもないと言ひ、家持を賛美する歌(三九七三～三九七五)

四日の詩に応えた七言詩と歌

三月五日 家持

三月二十日 家持 京にいる妻を思う歌
(三九七六、三九七七)

三月二十九日 家持 立夏になつても霍公鳥が鳴かないこ

とを恨む歌(三九八三、三九八四)

※三月三十日 家持 二上山の賦(三九八五、三九八七)

四月十六日 家持 夜に霍公鳥が鳴くのを聞く歌

(三九八八)

※四月二十日 家持 正税帳で上京するための宴で披露し

た別れの心情をうたう歌

(三九八九、三九九〇)

※四月二十四日 家持 布勢の水海に遊覧する賦

(三九九一、三九九二)

※四月二十六日 池主 布勢の賦に敬和する賦

(三九九三、三九九四)

※四月二十六日 家持、内蔵繩麻呂、古歌

椽の館で開かれた饞別で披露された

歌(三九九五、三九九八)

四月二十六日 家持 国守館で開かれた宴席歌

(三九九九)

※四月二十七日 家持 立山の賦(四〇〇〇、四〇〇二)

※四月二十八日 池主 家持立山賦に敬和した賦

※四月三十日 家持 京に入る日が近づいて別れを悲しむ
歌(四〇〇三、四〇〇五)

※五月二日 池主 家持としばしの別れを惜しむ歌

(四〇〇八、四〇一〇)

※印は、越中の地名を歌に登場させているものである。病中病後のある時期までは、家持も池主も越中の地名とは、全く無縁で歌を贈答している。ところが地名を詩で詠むと言うことは、三月三十日二上山賦が作られてから一変している。また天平十九年でまず越中の地名が登場するということから興味ある作品は、万葉五賦と呼ばれている歌である。越中での初めて開かれた前年の八月に開かれた宴席では、二上山と洪谿が登場していた。二上山は、大和にも類似した山がある。洪谿のある越の荒海は、高波で有名な玄界灘を知っている家持にも驚きの海であったであろう。どちらも都の人間には興味ある山であり、海である。しかし、家持の三賦には、二上山の賦には、「この山は射水郡にあり」、布勢の水海に遊覧せる賦には、「この海は射水郡の旧江村にあり」、或いは立山の賦には、「この立山は新川郡にあり」とあって、わざわざ土地の注記がある。歌に詠われた地名の所在を「郡」と「村」のレベルで注記したり、紹介するのは天平二十年春の出挙でも同様である。ここから家族レベルに贈るだ

けではなく、もつと地名の所在などを加えて贈るべき人の存在があったのかも知れない。しかし、歌の創作と言うことでは、山柿に触れた三月上旬も五賦が作られた三月下旬からも、都から使者が来ているわけでもなさそうである。

ところが地名と言うことでは、明確な違いがある。これは、越中を強く意識する都にいる人の存在があるからではないか。即ち、都にいる妻や叔母と言った存在ばかりか、橘諸兄等有力な貴族の存在である。四月二十日の日付を持つ三九九〇番の左注には、家持が正税使で都へ行くことが記されている。歌が出土産になる。弟には見せられなかった越中の風土が歌で紹介出来るのであるが、一方歌を期待する権門もいたのであろう。お土産としての歌の存在が越中の地名登場になったと考える。五賦はこの越中に於ける山紫水明と言う視点がある。国府傍にある二上山、さらにその眼下に広がる布勢の水海、そして白い屏風として広がる遠景の立山が登場している。

さて、作品を作る理念と言うことでは、越中守時代に注目すべく発言がある。それは、「山柿の門」という言葉である。

天平十八年六月任命、恐らく七月赴任、そして九月には弟書持の訃報が伝えられた。家持は、挽歌として長歌一首と短歌二首を詠んでいるが、その短歌には、

かからむとかねて知りせば越の海の荒磯の波も見せましも

のを(十七・三九五九)

とあって、この越中の風土を見せたい、知らせたい、と願う気持ちちがうたわれている。この越中の風土をうたい、そして伝えたいという心情は、望郷の気持ちと共に歌を作る契機になっている。しかし、積極的に越中の風土を伝えているかと言えは疑問である。むしろ、越中の風土を意識してそれを伝えたい時には、地名が歌に登場している。そのような例は、案外少ない。天平十九年の家持三賦、或いは天平二十年の春の出挙でうたわれた歌(十七・四〇二一、四〇二九)が代表であって、独り居て孤独に沈む心を慰めたり、或いは越中に後ろ向きで望郷の歌を創作したり、また宴席で披露される歌を作ることがほとんどである。

越中での歌友大伴池主は、大帳使の任を終えて天平十八年十一月に帰還している。家持は待ち焦がれたものであった。喜びの気持ちを二首の歌(三九六〇、三九六一)に表白した。さらに家持は翌天平十九年春に「忽ちに枉疾に沈み、殆に泉路に臨めり」(十七・三九六一 題詞)とあって、死を自覚する病に倒れていた事を知る。この天平十九年の春二月二十一日から九月二十六日までの四十四首は、玉井幸助氏が『日記文学概論』で最も日記的な個所として指摘したのであるが、家持と池主の書簡題詞を含めた歌の贈答が繰り返されている。

二月二十一日と二十九日に、家持は、病に臥したことを悲しむ歌（三九六二～三九六四）と病の苦しみを池主に訴えた歌（三九六五、三九六六）を作る。すると翌月の二日に池主は、二十九日の返礼歌（三九六七、三九六八）を贈る。すると三月三日に、家持は、「山柿の門」に触れた書簡と池主の示した二日の心情に謝した歌（三九六九～三九七二）をよむ。即翌日、池主は、三月三日をたたえた七言律詩を創作する。また、三月五日に返事が行き違いになっていたのであるが、池主は、「山柿」などは、家持の才能から比べるべくもないと言い、家持を賛美する歌（三九七三～三九七五）をうたう。すると三月五日に、家持は四日の詩に心えた七言詩と歌（三九七六、三九七七）をよむのである。

家持が中心になって歌作が行われているが、とりわけ三月には家持・池主が文学論を開陳して、三、四月には万葉五賦といわれる創作をしていることが注目される。病気によつてもたらされた寂寥を家持は池主に訴えた。天平十九年は、二月二十九日から五月二日まで書簡を含む和歌、そして漢詩が家持を中核にほぼ全てと言つてよいほど池主との贈答がなされている。まず「山柿の門」に触れた書簡を引用する。

三月三日家持書簡題詞（池主宛）

含弘の徳は恩を蓬体に垂れ、不費の思は陋心に報へ慰む。

来眷を戴荷し、喩ふるに堪ふること無し。ただ幼き時に遊芸の庭に涉らざりしを以ちて、横翰の藻はおのづからに彫虫に乏し。幼き年にいまだ山柿の門に逦らざりして、裁歌の趣は詞を聚林に失ふ。爰に藤を以ちて錦に続く言を辱くし、更に石を將ちて瓊に間ふる詠を題す。固よりは俗愚にして癖を懐き、黙已をること能はず。よりて数行を捧げて、式ちて嗤笑に酬ふ。

三月五日池主書簡題詞（家持宛）

昨日短懷を述べ、今朝耳目を汚す。更に賜書を承り、且下次を奉る。死罪々々。
下賤を遺れず、頻に德音を恵む。英靈星気あり。逸調人に過ぐ。智水仁山は既に琳瑯の光彩を韞み、潘江陸海は自かに詩書の廊廟に坐す。思を非常に騁せ、情有理に託せ、七步章を成し、数篇紙に満つ。巧みに愁人の重患を遣り、能く恋者の積思を除く。山柿の歌泉は此に比ぶれば蔑きが如し。彫龍の筆海は燦然として看るを得たり。方に僕が幸あることを知りぬ。

家持は、貴方の広大な徳が私の貧しい身に与えられ、心が慰められたと謝辞を述べ、続いて幼い時に文を学ばず、同様に山柿の風も修めていない。私は俗愚であるので、歌を差し上げる

が、お笑い種としてください、という趣旨である。一方、池主は、序として拙い文章であることを言い、家持の文章の優れていることを潘岳や陸機に肩を並べるとして、憂いを持つ人の心を晴らし、山柿など問題ではない、という。何故に「山柿の門」が話題になるかといえば、家持という歌人が万葉集の歌人をどう考えていたか、或いは七世紀から八世紀の理想歌人を誰と考えていたのか、文学史の興味と結びつくからである。柿本人麻呂や山部赤人などの単独説、また、人麻呂と赤人、人麻呂と山上憶良の二人を指す等の諸説があるが、定説は未だにない。^(注10)

しかし、この爆発的な創作意欲の原点に、文章や歌の徳が計り知れない慰めになったのである、と家持は言い、憂いを持つ病を癒し、晴らすのが詩文である、と池主が言う。このやり取りからは、二人の呼吸がぴったりと一致していることを知る。単に歌を贈答するだけではない、両者は文学論でも共通の理念を抱いていたのである。実作においても、家持が池主に贈った長歌が「大君の 任のまにまに 級離る 越を治めに 出でて 来し 大夫われすら 世間の 常し無ければ」(三九六九)と歌い出せば、池主の返歌は「大君の 命畏み あしひきの 山野障らず 天離る 鄙も治むる 大夫や 何かもの思ふ」(三九七三)という。家持が大夫であるわたしですら、世の中が無常であるといえ、天皇のご命令で遠い鄙を治める大夫である貴方は、物思いなんかしません、という。さらに池主は丁寧にか

持が物思いしないことを理由づけるのである。

この歌の贈答でも阿吽の理解があった。しかも、ここに示した三九六二番から三九八四番までの両者の歌二十三首には、越中の地名は一カ所もうたわれていない。これもまた見事な対応である。

池主と家持の歌に於ける、或いは文学論に於ける対応は見事でありながら、家持の考えた土地を支配する神とは、「皇神」であった。池主は、「神」としか歌わなかった。そもそも「皇神」とは、単なる神ではなく皇祖神である。

わご大君物な思ほし皇神のつぎて賜へるわれ無けなくに
(一・七七)

引用した御名部皇女の歌は、統治する神であり、皇祖を神とすることから天皇を神としている。家持の気持ちも同様であって、皇祖神と越中国を土地を支配している神を重ねているのである。この気持ちには、池主には見られず家持の感情である。家持は、万葉の「皇神の」「皇神に」の全用例五首中二首に用いている。もう一首は、二上山の賦(十七・三九八五)である。ちなみに吉野行幸を予想して「儲けて作れる歌」(十八・四〇九八)では、

高御座 天の日嗣と 天の下 知らしめしける 皇祖（すめろき）の 神の命の 畏くも 始め給ひて 貴くも 定め給へる み吉野の この大宮に

ともあつて、皇祖神と重なる天皇の支配する吉野と立山の類似を見せている。この心情は明らかに池主の歌に見られない。家持は、歌人として人麻呂・赤人に繋がる心情であるし、讃歌の伝統に正直な人でもある。

四、伝統の庶幾

家持が長歌を創作する時は、伝統を庶幾する気持ちが強かつたはずである。とりわけ挽歌に顕著に現れている。家持の挽歌は天平十一年六月の人麻呂亡妻挽歌（二・二〇七～二一六）に連なるうとする亡妻挽歌（三・四六二、四六四～四七四）、人麻呂殯宮挽歌に類似する天平十六年二月、三月の安積皇子挽歌（三・四七五～四八〇）、そして笠金村が志貴皇の薨去に作った挽歌（二・二三〇～二三二）に影響された天平十八年九月の弟書持挽歌（十七・三九五七～三九五九）がある。その意味では、立山賦は、山部赤人の富士山歌（三・三一七、三一八）と高橋虫麻呂の富士山歌（三・三一九～三二一）と人麻呂吉野讃歌（一・三六～三九）の影響が考えられる。

立山賦の最後は「言のみも 名のみも聞きて 羨しぶるがね」とあるが、これは類型と言つていい。人麻呂挽歌「音のみも 名のみも絶えず」（二・一九六）にある表現に近似して、さらに立山賦の創作主題に関わる。噂、或いは名前だけ聞いても魅力に満ちているのである。即ち、ここに家持が試みた伝統を庶幾する方法があるのである。表現は、類型的でありながら、それを越えようとする意図があることである。噂、或いは名前をと言うが、挽歌では永久に慕う手段としての名前と噂であるが、立山賦では人が羨む噂であり、名前である。越中という都の人に鄙としてしか存在しない名勝が噂であれ、名称であれ、語られることは貴重である。

池主と家持が山柿について共通の理解があつた。二人の贈答は上司と下僚でありながら、心温まる心情の表現が試みられている。一方池主は、上司の欠点を配慮して立山賦に和しているであろうか。とりわけ池主で評判がよいのは、立山の具体的な描写の表現の多面的なことにもある。「背向」に見える、神の山の名前をもつ、白い雲が重なりあうのを押しつけてそそり立つ「高き立山」、一年中真つ白に雪が降り積もつて年月を経ってきたので、磐も神らしくなっている、さらに「立ちて居て 見れどもあやし」とまでいう。この立山の形容は、家持歌の雪の立山、清なる瀬とある山川を補完する表現を試みているのかのときである。しかし、家持が長歌の結東部三句でうたった内容

は、噂と名前だけで羨ましく思う、ということである。果たして家持は、池主のいう、逆光の深山、万年雪を頂く高山、雲を押し分けてそそり立つ岩峰、さらに深山幽谷と言った具体的な立山を描こうとしていたのであるか。

要は、その中から万年雪である立山と清き河内と言え、家持には十分な形容であるという意識があったはずである。それが立山賦の方法であったからである。そのことを、多田一臣氏は、三つの原因を指摘する。^(注1)一、国土讚美は、王権讚美でもあり、常套的な表現の枠組みがある。二、家持の知覚が、この鄙の風土を認識し得ない。三、土地誉めは、みやびな世界の枠組みがある。ここで言う、一と三は、国土讚美は伝統的な表現の範疇で表現するということと括られるかも知れない。問題が二にある。池主と家持が同じ理念でありながら、池主が鄙である越中をそれなりに具体的に表現しているとすれば、家持も当然それなりに捉える能力がなかったとも言えない。即ち、家持が立山賦で述べたかったのは、具体的な立山の雄姿と激流の河内を描くことではなく、清なる河内であることを前提にして、立山讚歌が成立することを考えていたのであるまいか。

例えばあまりにも有名な麻呂の、

大君は神にし座せば天雲の雷の上に廬らせるかも

(三・二三五)

が天皇に対する讃仰と言うことで、類型的な他の歌よりも優れているのは、神と言うだけで具体的な業績も事業も評価も述べていないからである。荒れ地に都を造った、山中に池を造った等は、大君だから出来るのであるという天皇観がある、しかし、大君即神であるということとは、同質ではない。圧倒的な讃仰の精神は、天皇即神にある。この図式を家持が立山賦で踏襲した。立山は万年雪であることが図式として富士に匹敵する山になるのである。従って、具体的な描写はむしろ最小でいいのである。万年雪であると言う共通の特質で立山即富士となる。即ち、この立山に富士の姿が重なればいいのである。

雪、或いは雪が降ることは、お目出度いものであった。天平宝字三年元日の「今日降る雪のいや重け吉事」(二十・四五一六)の例を取り上げるまでもなく、吉事である。そしてもう一つの工夫である川が加われば、家持の意図は充分達せられたのである。立山が聖地吉野と同質になったのである。山、川、そして河内がそろったのである。むしろ、立山の饒舌な具体的描写などは、言わずもがなである。

要は、万年雪の立山といえ、富士の雄姿に重なり、清き瀬のある河内と言え、吉野に重なり、それでさらに様々の姿を描かなくても立山を含めた河内が聖なる地域となるのである。彼が試みたのは、名前だけでは、噂だけではイメージが生まれるべくもない川と山とを平等の立場で描写することで、大和吉

野たる越中立山河内を創造することであった。それが唐突な対句として、「山はしも 繁にあれども 川はしも 多に行けども」になるのである。

ここに至れば、家持と池主とは、創作の違いあつたと言うよりも、家持の意図が不十分であつた、と考えたい。長歌を比較すれば、既に家持の立山賦が存して、また池主の力量が家持を凌駕していたのであるから、立山の描写が貧困すぎることは即判断できたであろう。これまでも池主は、布勢の海水賦に敬和した作でも表現の優れた箇所があつたし、さらに漢文・和歌創作における到達度においても家持に勝っている面もある。

しかも、家持の創作意図が今回も理解できたのであるから、家持が川と山とを一对にして提示、さらに川の展開が試みられていることにも配慮があつたはずである。それは、直接川の表現を取らないが、「峰高み 谷を深みと 落ち激つ 清き河内に 朝去らず 霧立ち渡り 夕されば 雲居たなびき」という深山の溪谷を描きながら「清き河内」として、さらにその河内に「雲居なす 心もしのに 立つ霧の 思ひ過ぐさず」と言つてまた立山を偲ぶのである。池主は、家持の山と川の対句が川が清き河内に結びつく事と理解して、立山の描写を試みているのである。一方家持は、川と山とを対称のものとしている。

ここで一つ考えなければならぬことがある。片貝川が家持歌と池主歌にうたわれていることである。立山から流れる川は、

立山の範囲をどうするかで異なつて来るにせよ、富山湾に注ぐものでは、片貝川、延槻川（川早月川）、鶴坂川・売比川（神通川）そして万葉集に登場していないが黒部川、常願寺川である。片貝川は万葉集で登場する越中の最北の川であり、立山連峰の西斜面を源にする川でも北のはずれに位置して、標高二千四百メートルの毛勝山、或いは釜谷山、猫又山などを源にしている。『天伴家持と越中万葉の世界』所収の「越中万葉の地理」によれば、片貝川と立山の信仰上のつながりがあつて、常願寺川等をさしおいて片貝川が登場したのである、とする。^(注12)

家持は布勢の海水賦でも、湖からも離れた場所であり、その意味でもかなり唐突に「宇奈比川 清き瀬」とに（十七・三九九一）と国府から20キロも離れた氷見市の北にある現在名宇波川を詠んでいて、これもまた布勢の海水賦の評判を悪くしている。これは、国守家持の地理認識のなせることではあるまいか。即ち、布勢水海とは、家持にとつて宇奈川を含みもつ空間の広がりの中で捉えているということである。家持は、我々の常識を越える土地の広がりの中で布勢も立山も捉えているのであるまいか。即ち、立山では、立山連峰の中核と言うよりかなり北のはずれである毛勝三山までもが視野にあって、さらに片貝川までを含む地域の広さが立山賦にうたわれる範囲なのではないか。即ち、剣岳、あるいは雄山が立山連峰の中核としても、片貝川という北の端までも明確にされて立山歌が作られて

いると言うことである。ちなみに立山を地域的な意味で最大にうたうのであれば、当然黒部川が登場するべきであるが、立山の東の黒部溪谷などを流れてくる川であっても、黒部は彼の考えた立山の神奈備川には入らないのであろう。

ちなみに立山の代表的な川は、雄山などを源とする常願寺川であり、また剣岳を源とする早月川もある。これらは立山の中核をなす川である。その点立山連峰の北に偏った片貝川を登場させる時、川の流域が毛勝三山にまで拡大し、さらに神奈備山としての立山の範疇がいっぱいに拡がるという効果がある。片貝川が立山から流れる川の北にずれた位置であるが、土地の拡大という事からは北の限界まで拡がる。神奈備川には、中核である常願寺川よりも、その山麓の広大さと言う視点からは、家持にとって北のはずれに位置する片貝川が相応しいものだったのであろう。

いやしくも家持は、越中の風土に鋭敏であった。国守として初めての経験であったであろう春の出挙では、現在の富山県に関わる四首歌では、全てに川をうたう。雄神川（四〇二二）鵜坂川（四〇二二）婦負川（四〇二三）延槻川（四〇二四）である。延槻川の歌は、さらに川が立山を源流としているという発想である。それほど越中の河川が風土と結びつくのである。三千メートルの屏風から、一気に水が流れ落ち、大河として富山湾に注ぐのである。立山連峰、奥飛驒、或いは白山等が源で

ある越中にある暴れ川は、どれほど家持の統治を苦しくさせたのであろうか。その意味でも家持にとつては、川が持つ問題は身近なものであった。川の流域、或いは川を描かない山は、山の歌とは考えがたかったのであろう。こと越中では、山と川は車の両輪である。ここに指摘される家持の山の捉え方は、万葉では独自のものとして良い。しかも、川の存在と結びつく山の有り様は、アイヌの人々が付けた山名に近い性格があるのではないか。^(注13)即ち、狩猟を主としていたアイヌの人は、川の源流としての山がある。川の存在に影響されて山の名前が付けられている。川と山の結びつきの強さにアイヌ文化に近い性格が指摘できる。

家持には、彼独自の山意識があつて、それは片貝川を含む立山と言うことになる。そう考えれば、立山を具体的に剣である、雄山である、と考えるよりも、立山山塊として考えるべきことにもなるし、天皇のご命令である越中国守であることが越中という風土からも川にも拘らせたのである。

結 び

家持と池主の立山賦は、両者に統一した理念があり、創作されていることを知る。但し、そこには、家持独自の人麻呂や赤人に繋がる心情もある。川と山をほぼ同一なレベルで登場させ

て、皇祖神の支配する靈山立山河内を描くのが家持である。立山と片貝川の表現は、雪の立山、清き瀬の片貝川とあるだけで具体的な描写に欠ける。しかし、雪の立山と清明なる片貝川の瀬で越中吉野とすべき立山山川の誕生が試みられていたのである。しかも、富士と吉野の像が立山山川の表現に重ねられるのである。池主は、家持の短所を補う具体的な山と深谷を描いて、聖地越中立山を誕生させた。家持歌の地域的な大きさは、片貝川の登場で立山連峰の北に位置する地域にまで拡大してしまふことで理解される。即ち、長歌のまとまりと言う点ではやや疑問を残しているが、片貝川という北のはずれの川をうたうことで聖地立山が最大限に拡がったといっている。さらに、家持の山に対する考えには、川と結びつく山の存在という点で、アイヌ文化に近い性格もあった。

(注)

- (1) 『万葉五賦』には、「都人士に語り草として見せむの下心もあり」とある。16頁
- (2) 『万葉集全注』卷十七 四〇〇〇番作歌事情
- (3) 『万葉集積注』卷十七 286～287頁
- (4) 『二上山賦』試論(『万葉』第百七十三号)
- (5) 『大伴家持(3)』立山賦 231頁
- (6) 『万葉集全注』卷十七 四〇〇〇番考
- (7) 窪田氏『万葉集評釈』四〇〇三番語釈
沢瀉氏『万葉集注釈』四〇〇三番語釈
中西氏『大伴家持(3)』立山賦 237～238頁

(8) 注7中西氏に同じ。

(9) 『日記文学概説』第二章第一節 270頁

(10) 「山柿」については、未だに決着がついていない。但し、最近人は麻呂単独が強調されている。研究史の紹介も含めて芳賀紀雄氏が「越のふたり——家持・池主と『山柿之門』——」(『上代文学の諸相』所収)が詳細に考察している。また、内田賢徳氏の「未だ山柿の門に還らず」(『セミナー万葉の歌人と作品大伴家持二』)も研究史を踏まえた精緻な考察である。

(11) 『大伴家持——古代和歌表現の基層』第7章越中の風土 136頁

(12) 『大伴家持と越中万葉の世界』第5章越中の地理 110頁

(13) 深田久弥氏は、『日本百名山』で「大雪山」をアイヌ語の「ヌタクカムウシユベ」であり、「川がめぐる上の山」の意といい、さらに「トムラウシ」「後方羊蹄山」も川の名前から来た名称であるという。ちなみに深田氏は、家持の立山を「剣岳」としている。「たち」が「太刀」の意味であるから、剣岳も含めてた立山連山が太刀であったとも考えられる。梅沢俊氏は、『アルペンガイド北海道の山』(二〇〇一年版)で、川が生活の場であったので細かい支流にまで名前があったとして、「アイヌ語の山名は、主にその山を水源とする川の名からつけられている」(二六頁)としている。要は、山が川の名と切り離せないのである。